第95回二松學舍大学人文学会大会　講演題目・研究発表要旨

日時　平成十九年六月三十日（土）
場所　九段校舎本館中洲記念講堂

講演

国文学と人類学

人類学者・多摩美術大学芸術人類学研究所所長
中沢新一

研究発表

《国文学》

雅子内親王の斎宮卜定について
——『大和物語』九三段の社会背景の考察——

博士前期課程二年　大貫正皓

『大和物語』九三段において醍醐天皇皇女・雅子内親王は、藤原時平三男・敦忠との恋愛の最中に伊勢の斎宮に卜定されている。曽根誠一はこの問題を「情況を憂慮した恋敵師輔が、父摂政左大臣忠平を動かして、内親王を伊勢斎宮に卜食させ二人の恋の中断を計った」と、卜定自体、公的な手順を踏んだ神聖な選出とすることは疑わしいとし、藤原師輔・忠平による暗躍と推測される。その他の先行研究も同様の見解を示している。しかし、この斎宮卜定問題は複雑な社会状況の中で起こったことであるため、当時の状況を細かく検討した上で、もう一度捉え直してみる必要があると思われる。

発表では社会状況の理解という視点から、斎宮卜定の決定者について、そして雅子内親王が卜定された要因について検討をし、斎宮決定は醍醐天皇中宮の藤原穏子の意向が強かったであろうことを明らかにしていく。

『内裏名所百首』の有注本をめぐって
——注釈本文の生成と帝の歌の意識——

本学専任講師　五月女肇志

建保三年（一二一五）に成立した『内裏名所百首』は、順徳天皇内裏歌壇において、藤原定家・家隆・俊成卿女ら十二人の歌人達が、百首全てで名所を題として詠んだものである。

この百首の注釈書として、順徳院・定家・家隆という代表的な三歌人の歌だけを集めて注釈を施した本が、数多く成立した。これらの諸本は、抜粋する前の十二人本及び三歌人の家集『順徳院御集』